



寄稿

3 将棋

「藤井時代」の幕開け



毎日新聞大阪学芸部記者

新土居 仁昌

今年2月11、12の両日、東京・立川市で指された第71期ALSO杯王将戦第4局で挑戦者の藤井聡太竜王が渡辺明王将に勝利し、4連勝で初の王将位を奪取した。現在の将棋界には八つタイトルがあり、名人と棋王をあわせ持つ3冠渡辺と、王位、叡王、棋聖を持つ4冠藤井の「頂上決戦」となった王将戦だが、蓋を開けてみれば藤井の強さばかりが際立つ結果となった。将棋界は2018年、8人が8冠を分け合って「戦国時代」に突入したと言われたが、ほどなく、藤井、渡辺、豊島将之九段（元名人・竜王）、永瀬拓矢王座の「4強時代」に移行した。しかしそれも束の間、あっという間に「藤井1強」に収斂された。5冠の藤井は今年7月にやっと20歳になる。2022年は長い「藤井時代」の幕が開いた年として将棋史に刻まれることになるだろう。

私は2015年5月、和歌山支局長から大阪本社の学芸部に異動し、将棋と囲碁の担当記者になった。子どもの頃から将棋が好きで、大人になってからは囲碁の魅力にもはまった私にとっては文字通り夢のような職場。プロ棋士の対局を間近に見て、酒食の席では棋士たちの別の一面にも触れることができ（新型コロナウイルスの感染拡大期はだめだが）、ますます将棋と囲碁の虜になった。

さて、2015年は藤井は中学1年生。愛知に強い子がいるという話は耳にしていたが、まだプロ入り前の奨励会員だった（藤井は愛知県瀬戸市出身）。同年10月18日、大阪市福島区の関西将棋会館で私は初めて奨励会二段だった藤井少年取材した。この日、藤井は奨励会の例会（対局）で勝ち、13歳2カ月の史上最年少で三段に昇段したのだ。「羽生先生（善治九段）や谷川先生（浩司九段）といった偉大な先輩たちの記録を抜けたのはうれしい。三段リーグは厳しいところだが、早く（四段に）上がれるよう頑張りたい」と初々しく話してくれた。半年間で1人が18局戦う三段リーグ。険しい最終

関門を勝ち抜いた上位2人が四段に昇段し、プロになるシステムだ。

翌16年夏、藤井は4月から始まった三段リーグで白星を積み重ねていた。「1期抜け」もあり得る状況に、私は瀬戸市の藤井の自宅に取材にうかがった。両親を交えての取材で強く印象に残っていることがある。「息子が中学生でプロになることに不安はないか」と尋ねた私に、母の裕子さんは「ちょっと不安。将棋界も転換期だろうから」と答えた。そのとき、藤井は母の顔をいたずらっぽく表情で見て、「(将棋)ソフトが嫌いでしょ?」と言ったのだ。プロ棋士でも進化した将棋ソフトに勝てなくなっていた。「将来もプロ棋士は必要とされるの?」。母はそんなことを心配していたようだった。

当時、藤井は既に将棋ソフトを研究に取り入れていた。勧めたのは千田翔太七段だった。千田自身、早くから将棋ソフトを使っていた。千田に取材したときのこと。ソフトを使う理由を聞くと、「棋士全員に圧倒的に欠けているものは何だと思いますか?」と逆に質問が返ってきた。きょとんとする私に、千田は「形勢判断力です」と言った。将棋ソフトは局面ごとの形勢判断を「評価値」という数字で可視化してくれる。駒の損得などに一喜一憂することなく、冷静に形勢を見極めて指し手を決めていく。そんな力を養うのに最適な先生。それが昔はなかった将棋ソフトだということだ。

現在では研究に将棋ソフトを使わない棋士の方が圧倒的に少ない。とりわけ駒組みの段階でソフトが示す`定跡、は大前提であって、「知らなかった」ではお話にもならないというのが実情だ。ソフトを使った研究で急速に棋力を向上させた1人が豊島だ。プロ棋士と将棋ソフトが5対5の団体戦で戦った14年の電王戦に出場したのをきっかけに、研究スタイルをがらりと変えた。唯一、ソフトに勝った豊島(当時七段)は、それまで参加していた棋士同士の研究会から遠ざかり、自宅で一人、ひたすら将棋ソフトと向き合うようになった。理由について豊島は

①ソフトの方が人間よりはるかに強い②人間と違い、ソフトは自分の悪手を遠慮なく指摘してくれる③時間を自由に使える——の3点を挙げた。ソフトに自分が指した棋譜を入力して検証し、最善手を探る日々。「使い始めた頃は、ソフトが示す手段と自分の感覚とのバランスを取るのにかなり苦労しました。実戦では、人間は終盤で間違えていることが多いんだと分かり、考慮時間を残すようになりました」と明かした。

豊島は19年5月、第77期名人戦で当時の佐藤天彦名人に挑戦し、4連勝で令和最初の名人に輝いた。このときは王位と棋聖も持っており、3冠となった。将棋ソフトで勉強した成果が理想的な形として実り、私は「豊島時代の幕開け」と書いた。対藤井戦も17年8月24日の初対戦から6連勝した。周囲からは「やはり豊島が一番強い」との声が上がった。しかし、豊島はこのとき既に、藤井が異次元の実力を備えていることを肌で感じていたようだ。「藤井さんがトップでいるときに、戦える力を維持しておきたい」。そう話していた。

昨年。豊島は王位戦、叡王戦、竜王戦の三つのタイトル戦を藤井と戦い、計3勝11敗の大敗で無冠に突き落とされた。この事態は、豊島自身の想定よりも早かっただろうか。ただ、竜王を失冠した直後のJT将棋日本シリーズでは決勝で藤井を負かし、同棋戦で3度目の優勝を果たした。早指しの棋戦とはいえ、すぐに反攻の狼煙を上げ、豊島ファンを安心させたことだろう。

藤井のプロ入り当時に話を戻す。16年9月3日、藤井は第59回奨励会三段リーグの最終戦に勝利し、13勝5敗のトップの成績でプロ入りを決めた。三段リーグを1期で突破、史上最年少の中学2年生の棋士の誕生に将棋ファンが沸いた。記者会見で藤井は「どんな棋士になりたいか」と問われると、しばらく考えて「昇段したばかりなので、これから考えたい」と答えた。そして、憧れの棋士に谷川を挙げ、「ぼ

くも終盤が好きなので、そこを見てほしい」とちょっぴり自信ものぞかせた。

この慶事的一方で、同年秋から冬にかけ、有力棋士の将棋ソフト不正使用疑惑が持ち上がり、将棋界には暗雲が垂れこめた。調査の結果、疑惑は晴れた。だが、週刊誌やテレビのワイドショーでも大きく騒がれ、当人はもちろん、多くの棋士が心に深い傷を負った。当時、日本将棋連盟の会長だった谷川は17年1月、対応の責任を取って会長職を辞任した。どん底の幕開けとなった将棋界の新年。しかし、この窮地を救ったのが最年少棋士の藤井だった。16年12月24日のクリスマスイブ。詰め襟の学生服姿の藤井は、当時現役最年長の加藤一二三九段との62歳差のデビュー戦に完勝すると、その後も白星街道をばく進。いきなり29連勝の新記録を作り、それまで将棋に見向きもしなかった人たちをも振り向かせ、空前の将棋ブームが巻き起こった。プロ入り直後の藤井の対局は予選の1、2回戦ばかりだったが、私は大阪であった対局には全て足を運んだ。勝ち続ければもちろんのこと、負ければ、それも大きなニュースになるからだ。繰り返しになるが、藤井はまだ中学生。あの羽生でさえ、デビューからの連勝は6でストップし、7冠を制覇して羽生フィーバーが起きたのはずっと後のことだった。

さらに、藤井の活躍をきっかけに、藤井以外の棋士たちにも注目が集まるようになり、新しいファンが付いた。「勝負めし」やタイトル戦で出されるおやつも、自分では将棋を指さないけれどイベントなどを楽しむ「観（み）る将」の人たちで盛り上がり、タイトル戦を協賛する企業も次々に現れた。藤井のおかげで将棋界は救われた。

藤井の棋風は、飛車を定位置に置いたまま戦う居飛車の本格派だ。プロになってから振り飛車を指したことは一度もない。実は、これも希有なことだ。玉の守りが薄いことなどお構いなく、勝ちを読み切ると、すれすれのところを切

り込んでいく。師匠の杉本昌隆八段によれば、このスタイルは奨励会員の頃から変わっていないという。詰将棋解答選手権チャンピオン戦は5連覇中（直近2年はコロナ禍で中止）。藤井の読みには、「速い、深い、正確」の3拍子がそろそろ。しかも、どの要素も他の棋士を圧倒している。ひと言で言えば、手がつけられない強さということになる。将棋ソフトで勉強したから、こんなすごい力を身に付けられたのだろうか。だが、今ではソフトを使わない棋士の方が珍しいのだから、それだけでは説得力に欠ける。

多くの人が指摘していることではあるが、私もデビュー直後から藤井の将棋を見てきて、二つの点で強く感じることもある。一つは集中力。今期の王将戦第1局で、対局室に小さな虫が2匹舞い込むハプニングがあった。大の虫嫌いでもある渡辺はすぐに気づいた様子だった。そうこうしていると、2匹のうち1匹が藤井の和服の右袖に止まった。後日、「あの時は、虫は気にならなかったですか」と聞くと、藤井はぼかんとした表情。虫が対局室に迷い込み、さらには自身の右袖に止まったことに気づいていなかったのだ。これには私を含め尋ねた記者たちがみんな驚いた。藤井が集中して読みを入れている姿は、静かなるがゆえの迫力に満ちている。対戦相手もその姿に気圧されているかのようだ。

もう一つは負けず嫌い。藤井が関西奨励会で修行中の身の時、奨励会の幹事だった山崎隆之八段は「若い子には珍しく、対局中でもミスをするとうるさく膝をたたいて悔しがると話し、マナーの問題はあるにせよ、闘志むき出しの戦いぶりに感心していた。17年6月7日、デビューから21連勝して迎えた阪口悟六段（当時五段）との早指し棋戦でのこと。藤井が大詰めで間違えた。自分の玉は簡単な3手詰めの状態。ついに連勝が途切れたか、と取材陣も色めき立った。藤井は悔しさを隠さず、膝をバンバンたたいた。ところが、阪口の次の一手が大ポカ。1手30秒の秒読みの中で、警戒すべき筋を読んで

いるうちに、詰みを見落としてしまったという。29連勝の中にはこんな幸運もあったが、運も実力のうちだ。将棋界の第一人者となった今では、さすがに膝をたたくことはない。しかし、劣勢になったときにがっくりとうなだれる姿は時折見られる。「勝負師はポーカーフェイスの方が有利。メンタルを鍛えれば、さらに強くなるのでは」。私の問いかけに藤井の答えがふるっていた。「形勢が悪くならなければ、その必要はありませんから」

将棋界の記録を次々と塗り替えてきた藤井。常々、「記録は意識していません」と繰り返しているが、これからもどんどん記録を更新していくことは確実だし、8冠制覇を疑う人も少ないだろう。確かに、「AI超えの手」が現れる藤井の将棋はおもしろい。しかし、ふと思う。藤井が多くのタイトルを5連覇、10連覇と、長きにわたって独占してしまったらと。10年後でも藤井はまだ29歳なのだ。藤井より9歳年上の斎藤慎太郎八段は私に「ぼくらより下の世代は、将棋を覚えた初めからソフトで勉強するのだろう」と言ったことがある。藤井に立ちあがるライバルは次世代の登場を待つしかないのか。しかし、斎藤は最近、こうも話した。「今の将棋は10年、15年前の定跡重視の将棋より幅が広がっていて、指していて面白い。将棋の面白さはまだまだ眠っている」と。現役棋士の奮起にも期待しながら「藤井時代」の将棋を見つめていくことになる。